地物の位置を定めることの地域計画論的意義
（北河内地域における生活環境構成要素の定位による地域研究のために）

The theoretical significance of object-position measuring in the regional planning
—Toward the regional study by positioning of elements in the life-environment of Kitakwachi region—

谷　口　興　紀
Okinori Taniguchi

周知のように、科学的に研究を進めるに当たって、対象の測定技術は、もっとも基本的な事柄であり、どのような測定技術を採用するかによって精度が決まり、研究の成果が決まると言っても過言ではない。地域研究においても、対象地域の地物（生活環境構成要素）を、地域空間的に把握し、操作可能なデータとしてデータベース的に整備するシステムと技術の開発ならびに検索システムの構築の前提として、地物の正確な位置データの入手が、その基本的出発点である。それには、伝統的な測量によることが考えられるが、一方では、近年目覚ましい発展をしているGPSによる測定技術に依ることが、ある面での作業の容易さという点で効率的であると言われるが、実際に北河内地域において、そのような測定技術を使用して現地調査を実施しようとすると、現段階では、まだ、さまざまな技術的制約がある。それらの制約は、研究者自身が解決出来るようなものではなく、国土的、システム的規模のものである。将来的にそのようなシステム的条件が整うとしても、研究者に任される定位の地域計画論的意義について、ここでは、先取り的に、「環境デザイン的立場」から論じる。

「環境デザイン的立場」を定義的に述べれば、「ものがないこと」と「ものがあること」とにまたがって、事柄を理的（概念的）・事的（実践的）に取り扱うことである。言い換えれば、ものが何もないという前提から出発し、今・ここに、このものがあるという点に還るというイメージである。ここでの「もの」とは、物と者とを含み、環境デザイン対象という物だけでなく、環境デザイナーという者の存在も問われることを意味する。このように言うと、直ちに、そのように言う者（研究者）の存在はどうなるかという問いが生じる。それに対しては、このように言うことは、既に環境デザインを始めているのであると答える。つまり、環境デザイン的研究をすることは、すでに環境デザインに含まれるとせねばならない。

では、目の前に存在しているものを、どう考えるか、それを「ない」と言うか。それには、未だ計画の話しの世界に導入されていないという意味で存在していないと答える。この「計画の話しの世界」という限定を、「ところ」または局所性という性格として捉え、定

位と関係づける。しかし、計画プロセスにおいては、定位のゆれがあり、そのゆれを引き起こす計画的実存または計画主体の脱自の定位－非定位についてさらに論じるため、ものがあるとかないとを精密に論じる道具立てとして、クワインのクラスの仮理論を参照し、定位－非定位を記号的に表現するモデルとして、クラス概念を使用する「祖先関係」による解釈について検討し、さらに、計画の実現について、「北河内地域性」という観念について瞥見する。

本稿では「計画の話しの世界」という限定をしているが、その立場をはずす方向への展開が課題として残される。